



**芝井 敬司**—しばい けいじ  
 ■学校法人関西大学第22代理事長。1956年大阪市生まれ。1978年京都大学文学部史学科(西洋史)卒業。1981年京都大学大学院文学研究科博士課程後期中途退学。1984年関西大学に着任。1994年文学部教授、2002年文学部長、2006年副学長、2016年学長を歴任。2020年より現職。学外の主な役職に、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構評議員、公益財団法人私立大学退職金財団評議員、一般社団法人大学スポーツ協会理事など。

# 関西大学が描く 持続可能な 社会と教育

大学はいつでも  
若い力の挑戦と成長の舞台だ

## ◆学内、学問にとどまらず、社会とつながる

—理事長再任、学長就任おめでとうございます。読者に向けてひと言をお願いします。

**芝井** 前々期に学長をさせていただいて、その後、理事長を4年間務めました。さまざまなプロジェクトが動き始めている中で、完遂のめどがつくまでは引き続き尽力したいという思いがあり、再任させていただくことになりました。

関西大学は学部生と大学院生合わせておよそ3万人が在籍しています。3万人というと小都市の規模に匹敵します。この小都市を健全かつ適切に運営できるよう心くばりしていくのが、私の最も重要な役割だと思っています。

**高橋** 関西大学は社会とのつながりを大切にする大学です。教育・研究のみならずさまざまな角度から、地域の中で学生・教職員が共に活動し、あるいは企業の皆さんと現場で一緒に動き、社会と接点を持つことに努めています。それは本学の大きな力になっていると思います。この力を一層強め、学内にとどまるのではなく、学問にとどまるのではなく、我々の教育・研究を各方面にフィードバックしながら、社会とのつながりを守り続けたいと改めて感じています。

—学長はご自分の性格を分析すると、どのようなタイプですか？

**高橋** 前向きでしょうね。やるべきかどうかで悩んだら、どちらを選んだとしても後悔することはあると思うので、だったらやってみようというタイプです。

**芝井** 良いですね。私も、明治・大正期のジャーナリストである黒岩涙香の「仕事三則」に感銘を受け、「簡潔な仕事をしまし、迅速に仕事をしまし、痛快な仕事をしまし」の三則をモットーにしてほしいと、初めて理事長に就任したときの挨拶でお話ししました。やるかやらないかで迷ったら、やってみる。達成感のある痛快な仕事をぜひやっていきたいですね。

●理事長 芝井 敬司



●学長 高橋 智幸

芝井敬司理事長の再任、新たに高橋智幸学長の就任が理事会で承認され、2024年10月から新たな体制がスタートした。2025年度は新学部のビジネスデータサイエンス学部の開設のほか、大阪・関西万博も開催される。大学の社会的使命、新たな教育のあり方、学生への期待などを、関西大学の新しいリーダー二人が語り合った。

## ◆学生の考動力で加速する万博プロジェクト

—2025年4月に大阪・関西万博が開幕します。

**高橋** 関西大学は大阪で生まれ、育まれた大学ですので、地元・大阪で開催される万博に協力しないことはありません。また大阪・関西万博は「SDGs万博」とも呼ばれていますが、本学ではSDGsという言葉が浸透する前から人権問題や環境問題などに積極的に取り組んできました。学生時代にこれだけ大規模な国際イベントが開催されるというめったにないチャンスを生かして、学生にはお客さんとして参加するだけでなく、より深くかかわってもらいたい。そのきっかけを提供できたらと考えています。

**芝井** 2018年に万博の開催地が大阪に決まりましたが、招致にあたってはSDGsの実現を目標に掲げています。ですから、今回はSDGsのための万博なんです。世界の大きな課題に対してチャレンジする催しだからこそ、学生にも積極的に参加してほしいと思います。

**高橋** 現在、学生たちが自発的に立ち上げた「関大万博部」という団体が活動していますが、初めはそのようなコミュニティができるとは思っていませんでした。2023年度に、万博関連のイベントに参加した学生たちから「万博を大学から盛り上げていきたい！」との声が上がったことがきっかけで関大万博部が生まれ、だんだんメンバーも増えていきました。一番影響があったのは、2024年度の入学式で、芝井理事長が祝辞の中で関大万博部についてお話しくださったことでしたね。新入生が「私もやりたい！」ってどんどん集まって、百数十人にもなりました。

さらに、学内で実施された大阪・関西万博公式ボランティア説明会には600人を超える学生・生徒の参加があり、若い世代での万博への機運の高まりを感じています。



**高橋 智幸**—たかはし ともゆき  
 ■関西大学第44代学長。1967年山形県生まれ。1991年東北大学工学部卒。1993年東北大学大学院工学研究科博士課程後期中途退学。2010年関西大学社会安全学部教授。2018年社会安全学部長。同年学校法人関西大学理事。2020年関西大学副学長。2024年10月より現職。学外での主な役職に、文部科学省地震調査研究推進本部専門委員、原子力規制委員会原子炉安全専門審査会及び核燃料安全専門審査会臨時委員、高槻市都市計画審議会委員など。

■対談

◆SDGsを発信、大阪・関西万博で  
関西大学主体の展示が目白押し

高橋 大阪・関西万博で多くの方に見てもらいたい本学関連の企画を挙げるとすれば、まず一つはリボンチャレンジです。これは大阪ヘルスケアパビリオン内に設置される、大阪の中小企業やスタートアップの優れた技術力や象徴的な成果を発信する企画で、関西大学は大学として唯一選定されました。

他にも、催事スペースを持っているパビリオンから「ぜひ関西大学に」と声を掛けられ、複数のパビリオンで「関大DAYS」と題する期間限定の催しも行う予定です。

特設サイト「関大万博GOTO2025」を見てもらうと分かりやすいと思いますが、本当にさまざまな企画が進行していて、正直に言うと私も全部は把握し切れていません。それぐらい多くの企画ができるのは、やはり関西大学の総合力だと思います。学生たちの活動を見ていると、ただ楽しいことをやっているのではなく、「自分で課題や目標を設定し、解決策を考え、行動する」という過程を踏んでいて、この経験が彼らの力を高めているのが分かります。

大阪・関西万博の会場で、本学を卒業した51万人の校友の皆さんにも「最近の関西大学はこんなことをやっているのか、頑張っているなあ」と思ってもらえるようなものにしたい。

母校を応援したくなるきっかけとしても重要だと思っています。

関大万博GOTO2025  
ウェブサイト



◆ビジネス分野のデータサイエンスを学べる新学部

芝井 2025年4月から新学部「ビジネスデータサイエンス学部」が開設されます。ビジネスデータサイエンス学部については、前田前学長のもとで基盤ができて上がり、高橋学長(当時は副学長)にもご尽力いただきました。新たな学部を検討する中で、設置場所についての課題がありました。千里山キャンパスはすでに最大限活用しているため、これ以上はなかなか学生数を増やせない。新学部の規模を縮小すべきかの議論もありました。

しかしちょうどその時期に、新たなキャンパスのお話を受けました。元は武田薬品工業の研修所で、甲子園球場二つ分の広い土地。設備も充実していて、千里山キャンパスにほど近い立地で、工夫すれば一体的な運用ができるなどの条件が揃っていました。何度も議論を重ねた上で理事会で認めてもらい、2023年10月に「吹田みらいキャンパス」を開設することになりました。2024年4月には国際学生寮がオープンし、来春からはビジネスデータサイエンス学部の拠点としてスタートを切ります。

高橋 AIやデータサイエンスはいまや文理を問わずどの分野でも必要なものですから、関西大学では全ての学部を対象に「AI・データサイエンス教育プログラム」としてカリキュラムを開講し、数千人の学生が受講しています。

ではなぜ新たに学部を作ることになったのかというと、ビジネス力とデータサイエンス力の両方を兼ね備えた人材が今必要とされているからです。ビジネスにデータは欠かせません。しかし現代社会において、そのデータを綿密に分析し、知見を得て、戦略を練っていける人材が不足しています。先ほど申し上げたように



社会の要請を敏感に感じながら、やるべきことはきちんとやっていく。必要とされることに対し、賢く検討しながら、決断していく。そういう存在感のある大学でありたいです。

チャレンジに大小はないから、まず自分の目の前にあることに挑戦してもらいたい。その一歩が次のステップにつながるだろうし、経験や達成感にもなると思います。

関西大学は実社会とのつながりを大切にしていますので、そうした社会のニーズに応えられる人材を送り出すことを目的として、ビジネスデータサイエンス学部を作りました。この学部では「実践」を重視し、1年次から実習や演習を豊富に盛り込んだカリキュラムを予定しています。

芝井 ビジネスデータサイエンス学部は多くのご支援があって文科省からの認可を受けることができました。政府が実施する「大学・高専機能強化支援事業」にも採択されましたが、実はその支援プログラムができる前から、本学では新学部構想に取り組んでいました。その意味でも時宜に合った取り組みだったのかもしれない。既にデータサイエンスの名前を持つ学部は他の大学にもありますが、吹田みらいキャンパスを拠点としたことで入学定員を350人に設定することができ、これだけ大きな規模のところはないはずです。

ビジネスデータサイエンス学部  
ウェブサイト



◆グリーンエレクトロニクス工学科(仮称・設置構想中)が  
2026年4月に開設予定

——社会の要請に応えるということでは、2026年度システム理工学部開設予定のグリーンエレクトロニクス工学科もありますね。

高橋 グリーンは「環境」を意味していて、エレクトロニクスは「電子工学」。要するに「環境に配慮した電子工学科」です。この学科の大きなキーワードとして「半導体」があります。

かつては日本の半導体産業は世界的に大きな力を持っていた

たが、今では韓国や台湾などの新しい企業も参入し、日本の国際的なシェアは縮小しています。しかし日本の半導体製造技術においては、未だ世界をリードする高い技術力を持っていて、関西大学も半導体に関する研究レベルが高い。

半導体受託製造において世界最大手の台湾企業TSMCが2024年に熊本に工場を作り、北海道でも国内半導体企業ラピダスによる新工場建設が進められているように、国内外から半導体関連の大型投資が進んでいます。設備投資が進むということは、人材が必要になってくる。半導体技術者の不足はもう始まっています。本学には半導体技術に関する教育・研究の素地があるわけですから、それらを活用して、しっかりと社会の要請に応えるべく、新学科の創設を目指しました。

学生たちには実践力をつけてもらえるよう、実習に重きを置いており、その一例がクリーンルームです。クリーンルームは研究大学ならどこでも持っていて、本学にもあります。ただしそれらは研究用であって、普段の実習で使うことはまずできません。しかし、グリーンエレクトロニクス工学科の開設に向けて、学生が普段から実習で使えるクリーンルームを作る予定です。これは、噂を聞きつけた文科省の担当者が話を聞きに来るぐらいすごいことです。企業の方も、クリーンルームで実習を積んだ学生なら、ぜひうちに来てほしいと

グリーンエレクトロニクス工学科  
(仮称・設置構想中)ウェブサイト



芝井 いわゆる座学だけでは、もう大学教育はもたない。チームで学ぶ、対話の中から知識を得る、実習を通じてモノとの対話の中で

スキルを身に付ける、現実社会との接続を考える、そういったことが、大学教育の中でトータルに設計されていることが大事だと思います。

◆社会の要請に敏感に。大学もまた挑戦し続ける

高橋 学生たちのさまざまな取り組みを見ると、彼らが挑戦することに面白さを感じているのが分かります。挑戦をすれば、失敗もする。失敗で立ち止まるのではなく、なぜ失敗したか、どうすればいいかを考えてまた次の挑戦へと、学生が逞しく成長する姿はもう見ている楽しい。ただ、チャレンジするきっかけを探して足踏みしている学生も多いように感じています。チャレンジに大小はないから、まず自分の目の前にあることに挑戦してもらいたい。その一歩が次のステップにつながるだろうし、経験や達成感にもなると思います。私たちもいろいろなきっかけ作りをしていくので、ぜひそれらも活用して挑戦を始めてもらいたいと思います。

芝井 大学時代は、その後の長い人生のベースができて上がる時期だと思っています。その大切な時期にいる若者が3万人もいる場所であることが、関西大学の大きな特徴でしょう。その中でチャレンジし、努力し、考え抜いて、失敗したり、達成感を得たりする。そういう経験を積み重ねることが、人の成長につながっていきます。私たち関西大学は、いつもそういう場所でありたいという思いを強くしています。そのためには、大学もまたチャレンジしないといけない。社会の要請を敏感に感じながら、やるべきことはきちんとやっていく。必要とされることに対し、賢く検討しながら、決断していく。そういう存在感のある大学でありたいです。